

# 水戸考道・大石太郎・大岡栄美編著

## 『総合研究 カナダ』

(関西学院大学出版会、2020年)

田中 俊弘

関西学院大学は日本のカナダ研究において今や最重要拠点の一つになっている。1899年にアメリカ合衆国のメソヂスト監督教会が設立した関西学院は、カナダのメソヂスト教会が1910年に経営に共同参画して以降、大きく発展していった(本書第5章参照)。そのため現在でもこの国に対する関心は強く、充実したカナダ関連プログラムを持ち、多くの学生がカナダ留学を経験しているという(i頁)。この度、同大学の出版会から、日本カナダ学会(JACS)への貢献も大きい3名の会員が編者となり、5名のJACS会員—池田裕子、神崎舞、木村裕子、真田桂子、友武栄理子—を執筆者に加えたカナダ教科書が刊行されたことを、まずは祝福したい(他に木村仁とマッケンジー・クラグストンが執筆陣に名を連ねている)。日本カナダ学会編で『新版 史料が語るカナダ』や『はじめて出会うカナダ』(共に有斐閣)が出版されてから、すでに10年以上が経過している。以来、カナダ研究の総合的な教科書がしばらく作られなかっただけに、本書の刊行意義は大きい。

本書は、主に関西学院大学の全学科目の受講者向け教科書として編まれている。それゆえ、その構成や内容から、同大学とカナダの密な関係を理解させたいという意図も見えてくる。第5章に「日本の教育の近代化とカナダの教会—関西学院の事例」(池田)を置いて学院の発展過程にカナダの教会が果たした役割を論じ、第12章に元駐日カナダ大使で、現在関西学院大学では特別任期制教授を務めるクラグストンの特別寄稿「日本と私」を配して元大使の目から見た日加関係を掲載したのは、そうした姿勢の表れと言えよう。コラム10(水戸)で同大学がカナダの名門3大学と連携しているクロス・カルチュラル・カレッジ(CCC)を紹介しているのも同様である。

それらを含めて、限られた紙幅の中でテーマを如何に取捨選択したか—何を選び、何を選ばなかったのか—にこの教科書の特徴が見出せる。序章やあとがきで述べられている通り、本書はたとえば歴史、経済、先住民、教育、福祉、社会保障、そして環境などのテーマを十分掘り下げていないが(8頁、194頁)、それを否定的に捉えるべきではあ

るまい。編者たちのフィールドである地理学、社会学、政治学の観点を中心にこの国の特徴を説明し、関西学院とカナダの関係を意識させ、日本人としての視点から両国の関係(第9章「太平洋を隔てた隣国―日加関係」(木村裕子))や差異に目を向けるのが本書の視点なのである。また、それ以外の部分では、文化全般の中でもとりわけ「カナダの舞台芸術」(神崎)を第4章に収録している点や、ケベックを扱う二つの章―第6章「カナダのケベック州とメープルシロップ」(友武)と第7章「ケベック、北米に花開くフランス系文化と新しい共存の模索」(真田)―が、それぞれ歴史や名産品、文学、社会政策、そして間文化主義に至るまで、テーマを縦断したいかにも地域研究的な構成になっている点も興味深い。

以下、この教科書の構成に従って寸評を加えながら紹介する。

水戸による序章は、日加修好90年を振り返って両国の人的交流の歴史を紐解いた後、本書の構成や意図を説明している。読者には、この各章紹介を読んでポイントを再確認した上でそれぞれの章に進むことが本書の内容理解の深化を助けるはずである。

地理的特色を扱った第1章と都市と人口を扱った第2章は大石が担当している。それらはカナダ理解の土台となる情報であり、後の章との関連を紹介しながら本書全体のインデックス的な役割も果たしている。第1章は、州・準州名、地形的特徴、気候などを説明した後、産業構造などの紹介も交えながら諸地域の特色を、そして第2章は人口面での特徴を民族アイデンティティや地域差も意識しながら紹介した後、この国の都市の特徴を説明している。図表では、たとえば、合計特殊出生率が低く「自然増加」が少ないながら「社会増加」が多いカナダの人口面での特徴が図で示されているのはわかりやすいし、都市圏人口順に番号を振り、その数字を複数の地図に落とし込んでいるのも新鮮である。ただし、より詳細な地理情報を示した地図が本書には掲載されておらず、地勢情報などが活字だけで提示されているため、初学者には位置関係などが少しイメージしづらいかも知れない。

第3章は大岡が担当し、社会学的アプローチから現代カナダの特徴や問題を説明している。我々が抱くイメージとは異なって高齢社会であるこの国の実情と、専門性を持つ移民を多く受け入れてきた状況、そして移民政策の特徴を論じた後、「多様な背景の人種・民族・宗教の人々を受け入れながら、共通のアイデンティティや国家に対する誇りの創出に成功している」(47頁)はずのカナダで、ナショナリズム形成上の問題を表面化させた社会論争を具体的に紹介している。取り上げられたターバンとニカブをめぐる事例は、多民族社会の難しさを理解させる上で重要なトピックである。あえて難を言えば、それらの事例がカナダに特異なのかどうか少しわかりにくい。「ヨーロッパともアメリカ合衆国とも違うカナダのアプローチ(Canadian way)」(51頁)から学ぶべきとのメッセージで章を結んでいるだけに、カナダと日本や欧米との差異が明示してあれば、さらに良

かったのではないか。

続く第4章は、神崎がカナダのパフォーミング・アーツを扱っており、まず仏系の舞台芸術を、その後で英系の舞台芸術を、歴史背景を辿りながら紹介している。仏系芸術については、全体を四つの時期に分けているが、特に興味深いのは最後の「異種混合的・実験的な舞台芸術」の時代であろう。1980年のケベック州民投票とも結びつけながら州民の芸術に対する意識変化や多様化を解説している。英系芸術を扱った後半も、1980年代以降を舞台芸術の多様化の時代と紹介している。内容的には仏系芸術の説明に重心があるように見えるし、仏英の前後を入れ替えた方が、章のバランスが取れるが、この種の教科書では重要な問題ではあるまい。章の結びでは、「今後、言語による差異を超えた異種混合的な作品がさらに増え、カナダの舞台芸術はより多様性を増していく」(64頁)と分析して、カナダ文化が「二つの孤独」から脱して発展する未来を予見している。

太平洋戦争前の関西学院の歩みと、そこにカナダのメソヂスト教会が果たした役割を紹介した第5章(池田)は、日本の教育におけるキリスト教会の貢献の一事例であるが、自校史学習向きともいえ、他校で教科書とする場合は、やや利用法を躊躇する章となろう。とは言え、カナダ人宣教師C・J・L・ベーツの情熱の大きさや阪急急行電鉄の小林一三と掛け合うなど経営面での腕力を発揮する様子は、この大学の発展を支えた人物のライフヒストリーとしても興味深い。

すでに述べた通り、第6章と第7章はケベック州に割かれており、それぞれ、州に関する一般的な情報から特定のテーマに落とし込んでいくスタイルを取っている。友武は、ケベック州の歴史を説明した後、同州の代表的産品の一つであるメープルシロップに焦点を当て、早春の砂糖小屋で供される伝統的料理を紹介している。評者の関心から言えば、たとえば、多様なケベック料理をかつての母国フランスや現地の先住民と地産品との関係で説明してあればさらに面白かったと思うが、食文化に関心を持つ学生読者にケベックを身近に感じさせる内容になっている。

真田の章は、ケベックの歴史を友武とは異なる視点、すなわち「生き残り」から積極的な文化開花、そして間文化主義への展開を、ケベック・ナショナリズムを軸に紹介しながら、特に1980年代以降のモンリオールで民族の垣根を超えたトランスカルチュラルな文化が開花し、マイノリティたる移民作家たちが仏語での創作を行なっている状況を説明している。ケベックのフランス系文化と言われて私たちがステレオタイプ的に持つイメージは修正される必要がある。神崎の第4章も1980年代を新しい時代の始まりと捉えているが、今後は、すでに40年になる長い「現代」を分化させた視点も必要になっていくのだろう。

カナダの憲法や司法制度を扱う第8章(木村仁)の第1節では、1867年憲法の特徴を述べ、問題点を提示した後、1982年憲法の特徴を説明している。そして後者では、人権

憲章に基づいて違憲審査が行えるようになったが、人権憲章には適用除外規定が存在する点をカナダらしい特徴として紹介している。憲法の条項や判例を含めて具体的に説明しているが、逆にそのために、この学問領域に馴染まない初学者にはやや難しく理解しづらいかも知れない。それは、入門書で法学的な解説をする際に常につきまとう難しさであろう。評者としては、類書であり紹介されない法曹養成制度や裁判官の任命プロセスの説明を含む第2節が特に興味深かった。

日加関係とカナダの国連平和維持活動を扱う第9章と第10章は木村裕子の担当である。日系カナダ人の歴史と日加関係を組み合わせた第9章は、とりわけ第3節の戦後の日加関係の説明に特徴が出ている。節のほとんどが最近数年間の状況に当てられており、政治・経済・民間の各レベルでの両国間関係の現在が説明されている。「外交問題が起こることは極めてまれ」(138頁)な両国関係において例外的な日本政府に中国の元慰安婦への謝罪・賠償を求めた動議について触れるなど、読者の関心と呼ぶトピックを意識して盛り込んでいる。第10章のテーマであるPKO活動は、かつてはカナダの「ミドルパワー外交」の柱の一つであったが、今では見る影もない。その零落ぶりを図も交えて紹介し、ジャスティン・トルドー政権のテコ入れを期待して章を結んでいる。必ずしもカナダの現在の特徴とは言えなくなった分野の説明は難しい。木村も執筆の際に腐心したのではないだろうか。

この後、編者の一人である水戸の第11章「カナダの政治と社会」が本書のまとめ役を引き受け、さらに第12章にクラグストンの講演録が収録されている。水戸の章は、第3節で政治理念や政治制度についてアメリカ合衆国との比較の視点で説明しているのを除けば、「日本との比較」の章副題の通りに、カナダの政治制度(立憲君主制、連邦制、議院内閣制)、ジェンダー政策、多様性の承認状況などを我が国と比べながら紹介している。カナダの基本情報というべき内容を多く含み、また、テーマ的には他の各章と少し重なる部分もあるので、むしろ本書の最初に移動しても良かったように感じたが、それは編集方針を理解しない部外者の感想にすぎない。いずれにせよ、日本人の視点からカナダを理解させようとする本書の方針(と評者が感じたもの)がこの章にも見出せる。

本書に限った話ではないが、この種の紙媒体の教科書を作成する際に、悩ましい課題がある。それは、最新の数値や情報をどのように提示するかである。インターネット上の情報は定期更新が可能であるが、版を改めるまでに少なくとも数年のスパンを要する紙媒体の教科書では、情報がすぐに古びてしまう点を考慮しなければならない。また、教科書の中に白黒で無理やり掲載しなくて良い情報もある(本書について地図情報が不足しているとコメントしたが、実は詳細な地図にアクセスさせれば良いだけの話である)。評者にも明確な解決策は示せないが、たとえばQRコードを掲載してカナダ統計局のホームページなど各種情報源にアクセスしやすくして、読者が情報を自ら集めに行く意識を

持たせる工夫があれば、教科書としてさらに使いやすくなるかも知れない。紙面とインターネット情報を連携させるハイブリッド型の書籍作りが出来ないかと評者自身が悩む中で、話が本書自体の内容から逸れているが、今後の教科書作りにはそうした配慮も必要になってくるだろう。

関西学院大学がカナダ研究の拠点として多くの学生を育て続け、このテキストもシリーズ化して続刊が出されるようになれば、それが、日本にカナダ研究が定着する重要な土台の一つとなる筈である。

(たなか としひろ 麗澤大学)